

今回は、3月14日に行われた神経障害性疼痛関連歯科学会合同シンポジウムについて東京歯科大学口腔保健科学講座の福田謙一先生に報告していただきます。

神経障害性疼痛関連歯科学会合同シンポジウム開催報告

東京歯科大学 口腔健康科学講座 障害者歯科・口腔顔面痛研究室 福田謙一

一昨年の暮に中国武漢市で突如登場し、世界中の生活を一変させてしまった新型コロナウイルス COVID-19 感染症の流行が、我が国において騒々しくなり始めたのは昨年1月末である。そのため、昨年2020年3月8日(日)に予定されていた神経障害性疼痛関連歯科学会合同シンポジウムは、直前の中止を余儀なくされた。あれから約1年、感染の状況は好転することなく、今年の本シンポジウムはWEBで実施されることとなった。昨年予定されていた本シンポジウムの講演者の方々に多くを願いし、ほぼ昨年の内容をスライドしたプログラムで、2021年3月14日(日)にZOOMを使用して、事前に録画された講演の配信と討論のライブ配信が行われた。さらにそのライブの録画を3月14日から3月28日までの期間にオンデマンド視聴できるように設定した企画となった。参加申し込み数は109名で、当日のライブ参加は、常時70~80名と盛況であった。

セミナー企画運営委員長の村岡渡先生(川崎市立井田病院口腔外科)の事務説明、本シンポジウム企画委員長の私・福田謙一(東京歯科大学口腔健康科学講座障害者歯科・口腔顔面痛研究室)の開催の挨拶の後、村岡渡座長の司会によって午前部の部が開始された。まず、福田謙一から私ども診療科の臨床統計や症例から示した三叉神経損傷患者の現状と、新薬ミロガバリンベシル酸塩(タリージェ®)およびプレガバリン(リリカ®)を比較した講演が行われ、続いて口腔顔面神経機能学会推薦の小林明子先生(東京医科歯科大学顎顔面外科学分野)から下歯槽神経損傷患者に対する様々な感覚神経機能検査の詳細な説明、それらの検査値と自覚症状との関連についての調査結果を解説する講演が行われた。



小林明子先生の講演



コメントーターの和嶋浩一先生を交えた質疑応答・討論

2つの講演終了後、コメンテーターの和嶋浩一先生（慶應大学医学部病院歯科・口腔外科）を交えて、1回目の質疑応答と討論が行われた。質問はチャットを利用して受け付けた。座長がチャットから抽出した質問内容を講演者に問い、講演者がそれに答え、さらに座長とコメンテーターがそれらの内容をかみ砕いて討論に持ち込むという形式で展開された。想定以上に質問が多く寄せられ、有意義な討論となった。

質疑応答・討論内容をいくつか挙げ、簡潔にまとめる。

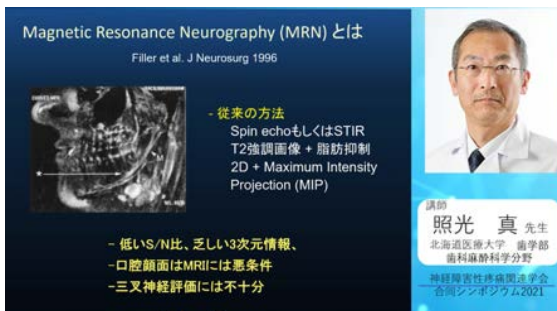
Q1：実際の臨床において、タリージェ®とリリカ®のどちらを選択すべきか？

A1：実際には、個人差があるものの総じて言うと両者間に大きな差はなく、薬価が安いリリカ®を試して、副作用等で変更が必要ならタリージェ®を使用する。

Q2：多くの感覚検査の中で最も予後を判断するのに役立つのは何か？

A2：触覚検査は必須であるが、それをした上での温覚検査が最も有効である。

午前の後半は、照光真先生（北海道医療大学歯学部歯科麻酔科学分野）から神経損傷病態を客観的に診断、評価する新しい方法としての神経MRI (Magnetic Resonance Neurography: MRN) について、その測定メカニズムや臨床的意義など大変わかりやすく説明された講演が行われ、続いて日本口腔外科学会推薦の高田訓先生（奥羽大学歯学部口腔外科学講座口腔外科学分野）からどのような状態の時に手術するのかなど実際の手術を提示して、神経損傷患者に対する口腔外科医の立場からの対応について講演が行われた。



照光真先生の講演



口腔外科学会推薦の高田訓先生講演

午前の終わりも、座長の村岡渡先生、コメンテーターの和嶋先生を中心に活発な討論が行われた。質問数も多く、時間は予定より少し超過したが、充実した時間となった。

質疑応答・討論内容をいくつか挙げ、簡潔にまとめると、

Q3：神経MRIの3テスラと1.5テスラは、測定時間など違いがあるのか？

A3：両者とも15～20分位である。3テスラの方が高性能であるが、アーチファクトには弱く、両者は一長一短である。

Q4：神経MRI診断の時期はどのくらいが適切か？

A4：急性期を過ぎた1ヶ月位が適切である。

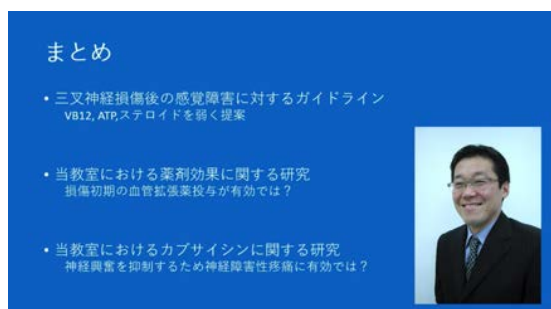
Q5：外科療法の適応と時期は早い方が良いのか？

A5：損傷が大きい場合が適応と考えている。一般的に早い方が望ましいとされている。

Q6：神経MRIによって、神経の切断が観察できるのか？

A6：極めて困難である。損傷部位には肉芽など様々な炎症性組織が介入するので、診断を下すのは難しい。

午後からは、私福田が司会（座長）を担当し、日本歯科薬物療法学会推薦の砂田勝久先生（日本歯科大学生命歯学部歯科麻酔学講座）から感覚機能改善を促す薬物の効果に関するこれまでの多種多様な研究結果について講演があり、日本歯科麻酔学会推薦の塩谷伊毅先生（日本歯科大学附属病院歯科麻酔・全身管理科）から動物実験で得られた星状神経節ブロックの有効性について動画を使用したわかりやすい講演が行われた。



日本歯科薬物療法学会推薦の砂田勝久先生講演



日本歯科麻酔学会推薦の塩谷伊毅先生講演

さらに瀬尾憲司先生（新潟大学歯学部歯科麻酔学講座）から外科的治療方法の種類や実際の手順についての説明とその予後について症例を提示した講演が行われた。ここで午後の前半としての質疑応答と討論が行われた。

質疑応答・討論内容をいくつか挙げ、簡潔にまとめると、

Q7：カプサイシンの鎮痛機序や副作用は？

A7：鎮痛機序は明確になっていない。副作用はないとされている。

Q8：外科手術後に痛みが出現するのはなぜか？

A8：神経の再生によって新たな受容体や様々な神経促進物質や神経抑制物質の生成が起きる結果として痛みが生じると推測される。

Q9：星状神経節ブロックが適応される時期は？

A9：回復を促す目的であれば、発症から直後～数ヶ月。神経障害性疼痛緩和の目的であれば、時期は関係ない。

Q10：痛みを客観的に評価する方法はあるのか？

A10：数値化して評価することは困難である。患者さんの生活支障度や様々な背景から評価する。

午後の後半では、坂本英治先生（九州大学歯学部歯科麻酔学講座）から、長期に渡る対応が必要な神経損傷患者の心理社会的背景について、これまでの研究結果の報告と症例を提示した講演があり、最後に末石倫大先生（第一東京弁護士会）から法的な対応について、多くの事例を挙げた大変わかりやすい講演が行われた。

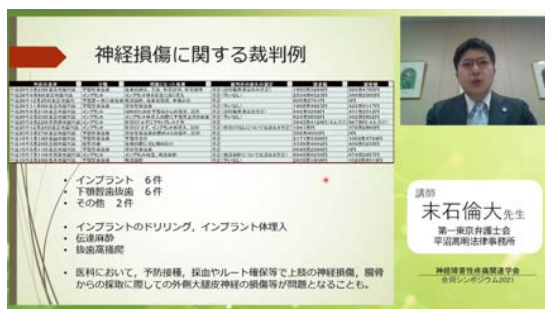


瀬尾憲司先生の講演

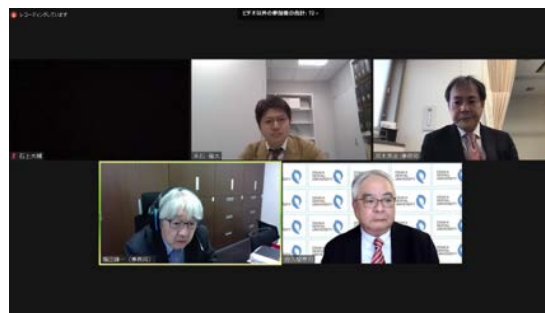


坂本英治先生の講演

そして最後の総まとめの質疑応答・討論には、午後のコメンテーターの佐久間泰司先生（大阪歯科大学歯科麻酔学講座）も加わり、多彩な質問内容に対し時間を忘れてしまいそうなくらい活発な討論が行われた。



末石倫大先生の講演



コメンテーターの佐久間泰司先生を交えた最後の討論

締め質疑応答・討論内容をいくつか挙げ、簡潔にまとめると、

Q11：インプラント体はすぐに除去すべきか、医学的または法的にどうなのか？

A11:医学的にも法的にも症例によって異なるので一概に除去すべきとは言えない。裁判に有利とも限らない。

Q12：智歯抜歯においては、事前にCTを撮影すべきか？

A12：注意義務を果たすためにも、撮影すべきである。

Q13：謝罪すべきではないとよく言われるがどうなのか？

A13：そのような対応を促す弁護士も存在するが、医療者として謝罪すべき場合は、謝罪すべきである。

Q14：「痺れ」はカルテに記載する際、陽性症状なのか陰性症状なのか？

A14：「痺れ」は、個人によってその言葉への捉え方が違うので、医療者は慎重に使用すべきである。

今村佳樹先生（日本大学歯学部口腔診断学講座）の発案・企画で2013年に大阪で1回目が始まった神経障害性疼痛シンポジウムは、今回の開催で6回目になる。WEB開催は初めてであったが、今回はこれまでで最も多い参加数であり、WEBで実施された効果であったと思われる。多くの地方の先生方が参加し、アンケートにおいてもWEBで行われたことがとても好評であった。今後の企画に参考すべきであろう。

最後に、WEBの管理や演出など多方面において小長谷光先生、大野由夏先生を始めとした明海大学歯学部病態診断治療学講座歯科麻酔学分野の先生方に企画遂行を支えていただきましたことを深く感謝致します。また、セミナー企画運営委員長の村岡渡先生を始めとした慶應大学医学部病院歯科・口腔外科の先生方にも事務面等、企画遂行に当たって多大なご協力をしていただき、深く感謝致します。

【福田謙一（ふくだけんいち）先生のプロフィール】



1990年 東京歯科大学卒業後、同大学歯科麻酔学講座入局

1994年 東京大学医学部麻酔科医員（国内留学～1995年）

1997年 アメリカ合衆国 UCLA Harbor Medical Center 麻酔科客員研究員（海外留学～1998年）などを経て、

2015年 東京歯科大学口腔健康科学講座主任教授／障害者歯科・口腔顔面痛研究室教授（同大学水道橋病院スペシャルニーズ歯科・ペインクリニック科長）

【自己紹介】

今特に夢中になっている関心ごとはありませんが、元来好奇心は旺盛なので、旅行好きで、映画鑑賞や読書なども分野を問わず好きです。しいて言うなら、歴史ものや海外の文化に接触するようなものが好きです。また、音楽やスポーツは観るのもするのも大好きです。ただし、好きなだけで上手ではありません。今興味を持っている研究テーマは、夜間のブラキシズムが咀嚼筋の痛みに関連するのか？抜髄後、抜歯後に痛みが残遺することがあるのはなぜか？舌や粘膜の灼熱痛はなぜ起こるのか？などです。なんとか定年までにいや死ぬまでに知りたい、探求したいと思っています。あ、あと忘れていました。美味しいものを食べることは何よりも大好きです（体型から想像はつくと思いますが）。好き嫌いは全くありません。お酒もなんでも好きです。性格は大雑把ですが、新型コロナが怖いのか止め処なくアルコールを手にぶっかけています。もしかして、成人発達障害なのかもしれません。最近の自己分析です。

日本口腔顔面痛学会 News Letter へのお問い合わせは

「日本口腔顔面痛学会事務局」まで

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11 一ツ橋印刷株式会社学会事務センター内

TEL: 03-5620-1953, FAX: 03-5620-1960 E-mail: jsop-service@onebridge.co.jp